

特殊幼児の保育技法について



北原歌子

・目標

本研究は、集団保育に行為法の新しい技術をとり入れて実践した研究のひとつである。精薄児の指導には、特殊教育・養護教育などの教員資格が必要とされているが、そうした専門職のひとつの中には、精薄というラベルで、病気を持った子ども、問題を持った子ども、普通の子どものとは違う子どもとしてとらえて、精薄児指導の一般的原則を型通りに実施しようとしたり、心理学の枠からテストをし、観察データを集めての、それが特殊教育であるとする人たちが、いるのではなからうか。

医師が患者を病気のある人として診断をし、治療をする、その過程と似た活動をしている人がいるが、本研究の目的は、心理劇

が、「診断即治療」であるという原理に立ち、心理劇の有効性が、集団保育指導において、実証されることを目指している。方法としては、臨床行為法を用い、児童の自発性、創造性、自立性を高め、集団保育によって、幼児期の人格形成と社会への適応性を深めることに、また本研究の目的がある。そして、この研究を、保育者の資質養成に、心理劇の、とくに監督養成の技法（形象描出の能力Ⅱ集団状況演出力の養成）が役立つことも明らかにしたく思う。

・方法

心理劇は、対人関係を科学的に研究して、われわれの生活を発展させていくために必要な科学的認識の基礎を、三者関係の原理

の把握において。「いま・ここで・新しく」という原理にもとづいて、教育治療関係に即した三者関係的技法が主として展開されている。監督・補助自我・演者・観客・舞台という役割をとりながら、皆が参加することのなかで、情緒のたかまりが感じられ、内的、外的認識が明確化されていく。

私は、この集団保育に必要な指導法として行為法を用い、言語的理解の方法にたよっての治療とはちがひ、実際に演じ、行為するという体験に重要な意味をもたせる方法をとる。それは、具体的な活動における体験的事実に重きをおいてすすめられる方法である。

三

ここで、二つの事例によって、子どもの可能性の発見、集団指導に役立った心理劇的技法をのべる。

・指導の形態

この事例は、ある保育グループ年長組四歳〜五歳の女子七人を対象としている。保育内容は、普通の幼児指導と変わらない。子どもたちは、ダウン氏症状を生まれた時からもっている、いわゆる知恵おくれで、ことばも思うように出ない、身体的にも運動神経が未発達であるというハンディのある子どもたちである。

リーダー・チームは、主リーダーが私、サブ・リーダー二人、

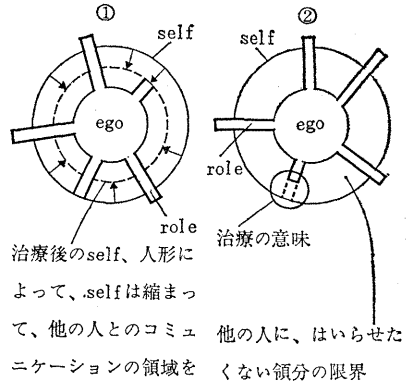
保育補助者四人の編成である。週二回、二時間の集団保育指導を行なっている。

・三者面談法による人形治療 Puppet Therapy

人形治療法は、人形を仲介として、治療者と患者のコミュニケーションを促進させることにあるが、ここでは、子どもと母親とセラピストの三者のいる状況で、セラピストは、監督と補助自我の役割をとって、心理劇的效果をあげる。これは、人形を用いて実際の臨床場面の例である。心理劇の原理に即して、自発的な行為を促すような働きかけが行なわれる。心理劇でも、人形治療でも、実際に行為し、体験する中で、子どもの創造性、自発性が人形とかかわりあいながら、また、母親とまた、セラピストとかかわりあいながら育ったと思われる場面である。

人形治療で、人形を治療者が使う意味は、自己selfが、自我egoに近づくことにある。人には、それぞれ、他の人に立ちいられたくない領分の限界があり、ある人は、非常に近くまで人が立ち入っても困らないし、ある人は、自己を自我の遠くにおくことによって、他人の介入を防いでいる。人形治療のねらいの一つは、Role Play 役割あそびによって、この限界を短縮し、人と人との接触、コミュニケーションを助けることにある。

ここでの方法として、特に新しくあげられることは、三者のいる状況での治療が、その子どもにも、母親にも、セラピストにも



治療後のself、人形によって、selfは縮まって、他の人とのコミュニケーションの領域をひろめる。

変化をもたらし、人間関係の発展を助ける効果である。一つ一つのプロセスを押えることも大切であるが、セラピストが、人形治療法の原理的なものと、三者関係論の認識を深めた上で、このセラビイを行なうことが、ま



題を聞き、問題点を明確にしながら場面設定をするのに似て、人形治療でも、親との話し合いを行なう。

③ 導入法—ウオーミング・アップとして、人形あそびを始める前にセラピストは、子どもの気持が自由に、緊張がとけるように、話しかけたり、独白をいったりする。独白は直接、子どもに働きかけるわけではないが、独白という間接的な方法で、治療者の気持を表明し、それへの子どもの反応をみながら、状況展開の働きかけがなされる。

④ 場面展開—ウオーミング・アップのあとで、人形を三つとり出す。そして、子どもの手に、人形がふれた時から、状況展開の働きかけがなされる。

⑤ 関係的發展の状況—子どもを、人形あそびの状況に入りやすくし、人形への同一視が行なわれやすい状態をつくりだす。人形が、セラピストの補助自我の役割をとって、セラピストは、相手の患者と直接に話すのではなく、人形と話す。人形と患者との関係で、患者は、話しやすい状況に立ち、セラピストとのコミュニケーションが容易になっていく。

⑥ 役割交代—子どもが、遊びにのってこないと思われた時には、Role 役割をかえてみる。実際には、たとえば、人形をとりかえて

ず、大切なことである。この点が、特色と思われる点で、単に人形を媒介として、Role Play をすることは、その狙いも効果もちがってくる。ウオーミング・アップをする以前の状態設定の意味、ウオーミング・アップの目的方向性の明確化、プロセスの中で、セラピストの発見、かかわり方の技術的变化は、より人形治療の効果をおよぼすものである。

A・方法

① 状況設定—室内、長椅子一つ、補助椅子一つ、カップ人形（※ページ人形）三つを用意する。

② 課題の明確化—心理劇の監督が、劇を始める前に、参加者の問

「みましようか」と、子どもの気持を尊重して誘う。

⑦働きかけの変化の方法―最初は、子どもが人形を動かすことに、興味をもつように働きかける。―人形といっしょに自分も動きたくなるように働きかける。―人形といっしょに自分も動く、その中で、ことばがでてくるように働きかける。―遊びが自由になったときに、場面転換をして、母親の参加を誘い、より子どもの創造的、自発的活動を高める。―母と子とセラピストの三者関係が、人形なしにも展開することができるようにする。

B・臨床実例（昭和四十五年二月、治療場面記録）

女児、四歳五ヶ月、ダウン氏症状、ことばは、ママ、プーピーなど単語二十ほどがでる。人形の使用時間、約十二分。

①準備―安定したふんい気の六畳の部屋の壁よりに、長椅子一つ、R子、母がはなれて坐る。セラピストの私は、R子より約1m^{50cm}はなれて、中央よりややR子よりに、むかいあうように坐る。（長椅子に母と坐ることは、子どもと母が椅子でつながっていることで、子どもの不安を軽くする。）カップ人形を三つ用意する。

②母の提起した問題―子ども集団の活動の場で、R子は、石のよりに黙って動かず、先生や友だちの働きかけに全く応じなくて

困っている。

③場面展開―R子、黙って、うつむいて、一点を凝視、身体中かたく、こわばらせている。人形を一つ、子どもから約20cmはなして置き、一つだけセラピストが持ち、母も一つ持つ。

④場面 a

T―こんにちは。Rちゃん、こんにちは。（人形の頭をさげる）

R―（そばにおいてある人形をみた）

T―Rちゃん、いっしょにあそびましょう。（人形を少しR子

に近づける）

R―（一人で人形の一つをさわり始める）

T―Rちゃん、さようなら。（カップの中に人形をいれてみる）

R―（カップの中に、かくれた人形を見て、そばにおいてある人形を手にして、自分もカップの中に入れようとする。よく

はいらないので、またやってみる。まだ、はいらぬ）

T―人形をかえてみましょうか。（Tの人形ととりかえる。そして、カップの中にはいつている人形を出してみる。また、すぐカップの中に入れてみる）

T―おはよう、先生。

R―（Tの人形をみて、自分の人形も、カップから出す）

T―こんにちは。（人形の頭をさげる）

R―（口で）こーんちは。（人形の頭をTの人形と同じように

さげる)

Tーいっしょにあそびましょう。トン、トン、トン、トン。(人形が歩くように、R子の人形に近づける)

Rー(長椅子の上に立ち上がって、人形といっしょに歩き始めた)

Tーさよなら。(人形の頭をさげる)

Rー(口で)さよーら。(人形と自分といっしょに頭をさげる)

T・Rー(ほとんど同時に、お互いの動きが、カップの中に人形をいれる)

⑤場面b(つづけて)

mーこんにちは、Rちゃん。(人形といっしょに母が頭をさげる)

Rー(口で)こーんちは。(一人で、人形をカップの中にいれたり、出したり、自由にしながら、ことが出はじめる)

Rーママ、ブーブー(人形のカップを、お風呂に^{みたてて}、カップの中に人形をいれる)

Rーママ、ブーブー、ゴシゴシ(頭の毛を、カップから出し、洗うしぐさをする)

mーおぶですか。

Rーママも。(母の人形をとって、自分の人形と二つ並べ、二つの人形の頭を洗う)

Rーねんね。(二つの人形を並べて、カップに人形を入れてねかす)

Rーおつき。(自分の人形をおこす)

Rーママも。(母の人形もおこす。両手に一つずつ持つ)

Rーおつき。(一つの人形を置き、一つの人形のカップに口をつけて、人形の顔に口がつくようにして、徐々に、カップから人形を出す)

Rー(そばで、みているTにむかって、だまって人形の頭を上げる)

Tーこんにちは。(Tは、人形なしに、R子に話しかける)

Rー(口で)こーんちは。(人形といっしょに自分も頭を下げる)

Rーママも。(Tにむかって、頭を下げるように指示する)

mー(自分の人形をとって、人形といっしょに、Tにむかって頭をさげる) こんにちは。

Tーこんにちは、ママ。

Rー(母の人形の動きをみて、自分もまねをする)

Rーママ、トン、トン、トン、トン、(人形を母に近づける)

mーはい、トン、トン、トン、トン、(R子の人形に並んで、母の人形も歩く)

Tーバイバイ。(人形なしに、R子にむかって、手をふる)

Rーバイバイ。(Tにむかって、顔をみながら、顔中笑みをうかべて、手をふる。人形を胸にだいたまま)

Rーママもバイバイ。(母の持っている人形を自分が持って、母にも、Tにむかって、手をふるようにいう)

mーバイバイ(R子といっしょにTにむかって手を振る)

Tーバイバイ(R子と母子にむかって、手を振る)

・結果の考察

治療効果として、あげられることは、三者関係の状況において、人形の媒介なしに、コミュニケーションができ、子どもの新しい状況に適應するプロセスが明確にされ、母における発見も大きいものであった。

R子のこの遊びの中で、・カップをお風呂にみたくて、・洗う、・起きる、・歩く、・口づけ、など、自発性が高まって、創造的活動がみられた。

子どもの日常の生活場面、生活習慣が、カップ人形を使うことのみなで、えがきだされたり、人形を使って展開される場面に、日常の生活場面、生活習慣を、あてはめることができた。また、カップの中に、人形を入れること、出すことの変化の意味が理解され、人形を入れるときの状況を、自分で考えながら変えることを体験した。また、動作と言葉と人形操作の三つの意識を、同時

に成立させて遊んだことは、このセラピイをする前には、それが可能とは、考えられなかったことであった。自分と母とセラピストの三人のいる状況を認識して動くようになり、最後の場面では、母にむかって、セラピストに、手を振るように方向指示をしている。こうして、石のように黙っている子どもにおいて、状況、場の変化、それにかかわる人のあり方での変化で、その子どもの変化をもたらすことが明白になったと考察できる。

これは、三者面談法による人形治療であるが、そこに集団心理療法としての効果をとらえることができる。

(*印)ステージ人形、カップ人形は、お茶の水女子大学教授、松村康平先生が、理論的立場から意味づけ、名づけたもの。日本心理劇協会デザイン・パターンの人形がある)

・ミラリング(鏡映法)、ダブルリング(二重自我法)の技法によるゆうぎ指導

集団指導の現場では、保育者であるセラピストは、その場の状況によって、心理劇的技法のどれを適用するかを考えるが、ある時は、技法を新しく発見して活用することもする。保育者の資質養成に、心理劇が有効と思われる点は、とくに、この点で、状況における関係の発展がもたされるように、心理劇的技法が活用される時、指導者は、その発展の方向を洞察して、関係の発展に

必要な関係のしかたを成立させねばならない。ある状況からある状況への推移を予測的に、「目に見る」ことが技法の発見には必要となる。この実例は、私の体験から精薄児の集団指導において、心理劇の技法、ミラリング・ダブルングの技法を併用して、集団行動のとりにくい子どもたちのゆき指導を、とくに、意識の集中にねらいをおいて行なったものである。

・方法

- ①場面設定―子ども四～六人(偶数)で、まずホールの中央に輪になって立つ。音楽♪きらきら星♪
- ②技法的位置づけミラリングの技法(つまり、鏡に自分を映してみるように、他の人が演じる自分をみて、そこから新しい自分を発見していく方法)を、まず、子どもの立つ位置から用いる。前に立つ人が別の鏡に映る自分であるように お互いに立つ。前の人の動きを、自分の動きとして、とらえやすいように、位置づけて立つ。
- ③ダブルングの技法(つまり、セラピストが、補助自我の役割をとって、患者の動きを誘い、患者のダブルとなって患者の自我の動きを誘う技法)により、保育補助者が、子ども一人ずつの後に立って、二人で一人の役割をとる。後に立った補助自我は、子どものダブルとなって自我の動きを誘うよう、子どもが

順序とふるまい方をおぼえるまで補助する。

- ④同時に補助者は、ミラリングの技法の役割もとる。自分と組になっている子どもの、前に立つ子どもの鏡となって、その子どもも動きをささいながら、正確なものにする。

- ⑤準備と、補助者の役割が明確になったところで、音楽がセラピストの指示で流れる。

- ⑥♪きらきら光る♪で、補助者は、後から、前の子どもの手をとって、頭の上にかかげて、きらきら手をふる。

- ⑦♪あなたの星♪で、手を叩く。ダブルであるから、一組がいっしょに手をたたく。

- ⑧五回、この歌を、補助者はダブルで、いっしょに手をとってくりかえす。

- ⑨補助者は、手を少しずつ離しながら、いっしょになっている気持でくりかえすと、子どもは少し覚え始めて、後をふりかえりながら、自分で手を、きらきら、させ始める。

- ⑩子どもに、「前にいるA子ちゃんのをみてみましょう」と指示をする。A子の後のA子の補助者は、A子の前に立つB子の意識がはっきりするよう、踊りながら、B子のミラリングの役割をとり、声をかける。

- ⑪子どもどうしが、前の子どもの動きをみながらするようになる。

⑫後の補助者は少しずつ、子どもから離れてみている。必要な時はすぐに、役割をとれるようにしながら。

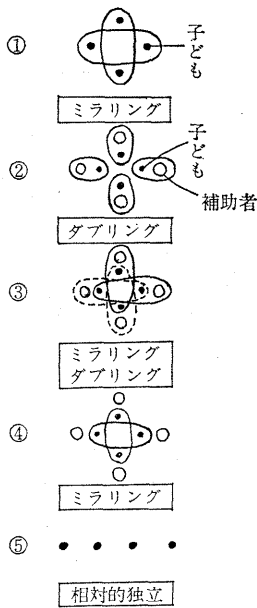
⑬子どもだけで、丸く輪になって、できるようになる。補助者は後にさがる。子どもだけのミラリングである。

⑭もう、すっかり自立して、子ども自身で音楽に合わせて、ふりつけの順序にしたがって、ふるまうことができる。

⑮一列に子どもが並び、ミラリングなしに、ひとりひとりが、相対的に独立をしながら踊れるようになり、集団活動への参加が可能となる。

・結果の考察

ゆうぎ指導において、子ども自身に必要な意識の集中が困難な状態の時、保育者が、いくらあせって教えても、こちらの目標と



子どもの活動が一致せず、空まわりばかりする。それが、このような方法をとって、一つ、一つ、技術のステップをふまえながらの指導を行なうと、集団活動が容易になる。メロディと、ふりつけと、ふるまいの統合が、個人において成立する。集団の場の力の誘引性を活用しての指導の一例である。

四

・終わりに

心理劇的方法での、子どもの理解ということとは、子どもを、理解しようとする人から、切りはなして、子どもそのものを、とらえることではない。子どもについての過去をあまり知らなくとも、子どもの指導に役立つ技法をうることのできる道が開かれている。心理劇が、日常生活にもっともっと、とりいれられるようになると、理解に役立つ知識と、指導に役立つ技法との一致がもたらされるようになると思う。

参考文献として、松村康平「子どものおもちゃと遊びの指導」フレーベル館、その他を活用させていただいた。臨床事例の一は、昭和四十五年五月、京都女子大学での、日本保育学会第二十三回大会開催時に、「行為法による精神薄弱児集団保育の実際」として、発表したものである。